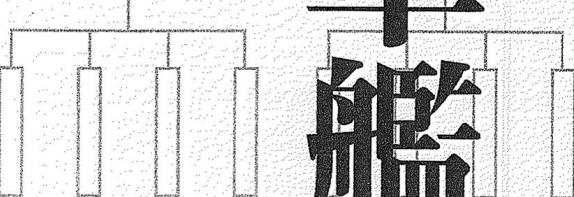


幕末軍艦の変遷

追加発注をおこなった。米国でスループ艦（コルベット）に次ぐ小艦）1隻、オランダでフリゲート艦1隻が建造された。両艦ともスクリュー推進の木造蒸気軍艦で、前者が排水量2590トンの「開陽丸」（慶應3年引渡し）である。「開陽丸」の船価は洋銀40万ドル。建造時のオランダの海軍大臣は、前出のカッテンディーケであった。



海事史家 山田廸生

長崎海軍伝習所の設立

国を守るのは「人」である。軍艦や砲は道具にすぎない。開国後、幕府が海軍を創設するにあたり、士官養成のための伝習所を長崎に設立したのは、賢明な判断であった。伝習所の設立を提案したのは、オランダ軍艦「スンビン」艦長のフアン・アビウス中佐であるが、それを決断した長崎奉行の水野忠徳、筆頭老中の阿部正弘の大局観もすぐれていた。

伝習所は安政2年（1855）、長崎奉行所西役所に設けられた。伝習所でオランダ教師団の指導を受けた学生たちは、やがて、幕末明治の日本になうことになる。幕臣の勝海舟（学生長）、矢田堀景蔵（同）、中島二郎助、小野

友五郎、榎本武揚、佐賀藩の佐野常民（学長）、中牟田倉之助、薩摩藩の五代友厚、川村純義といった人々である。

海軍教育には練習艦が必要。オランダ国王は「スンビン」を將軍に献呈した。これが「觀光丸」である。排水量780トン。外輪推進の木造コルベット艦（フリゲートに次ぐ小艦）で、幕府海軍最初の蒸気軍艦となつた。

これに先立ち、幕府はオランダにスクリュー推進の木造コルベット艦2隻の建造を依頼した。2隻は安政4年（1857）と翌5年にオランダから長崎に到着し、伝習所の練習艦になった。排水量625トンの「咸臨丸」と同型艦「朝陽丸」である。

幕府海軍の蒸気軍艦

しかし、4隻では足りない。幕府は

テンドイケがひきいるオランダ教師団（第2次）がやってきた。そのなかに艦船修理工場の設立指導者もいた。軍艦を持てば修理施設が必要になる。幕府はその配慮も忘れなかつた。この修理工場がのちの長崎製鉄所であり、やがて長崎造船所に発展する。

同じころ、英國女王から將軍に、王室の武装ヨットが寄贈された。のちに箱館海戦で「朝陽丸」を沈めた「蟠龍丸」である。

出自はプロシア海軍で、のち英國に売却。慶應2年（1866）に幕府（長崎奉行所）が洋銀18万ドル余で入手した。排水量1678トン。木造で外輪推進。鉄製でスクリュー推進になりつつあつたこの時代の蒸気軍艦としては旧式艦である。が、船体も機関も堅牢であり、箱館戦争では、「開陽丸」の喪失後、榎本艦隊の主力艦として健闘した。

特集 咸臨丸太平洋横断150年

その「回天」と箱館戦争時に戦ったのが、異色の蒸気軍艦「甲鉄」である。排水量1358トン。スクリュー推進の木造船甲艦（水線付近を厚い鉄板で覆った艦）であった。

米国の南北戦争時に南軍の発注によりフランスで誕生し、「ストンウォール」と名づけられたが、米国に着いたときには戦争はすでに終了。それを幕府が洋銀40万ドルで購入したのである。

ところが、横浜到着時に幕府が瓦解していたため、新政府艦隊の主力艦となつた。肝腎なときに間に合わない軍艦であったが、箱館戦争には間に合つた。

蒸気軍艦の国内建造も始まつた。幕府は江戸湾（のちに大坂湾）の防備用に同型の軍艦30隻の配備を決め、1番艦の船体建造を石川島の造船所、主機製作を長崎製鉄所に命じた（ボイラードは佐賀藩が製作）。これが慶應2年建造の木造砲艦「千代田形」である。

排水量138トン、スクリュー推進。日本人の手で設計し建造された最初の蒸気軍艦である。基本設計は小野友五郎、機関は肥田浜五郎、兵装は沢銕太郎が受けもつた。いずれも海軍伝習所出身の技術者である。

幕末期における幕府海軍の蒸気軍艦は、以上の9隻（甲鉄をふくむ）である。

保有する艦船がふえるにしたがい、幕府は江戸の近くに、修理工場をもつ必要を痛感した。長崎製鉄所では遠すぎたからだ。そこで慶應元年（1865）、フランス人技術者の協力により横須賀製鐵所が着工されたが、その完成は明治維新後になつた。

諸藩海軍の蒸気軍艦

諸藩も海軍をもつようになつた。開国後、幕府が大船建造禁止令を解除し、洋式軍艦の建造と保有を認めたことが背景にある。

諸藩の蒸気軍艦は、佐賀藩4隻、薩摩藩3隻、長州藩・松江藩各2隻、土佐藩・久留米藩・熊本藩・福井藩・秋田藩各1隻（造船協会『日本近世造船史』）。

佐賀藩の鍋島直正（閑叟）、薩摩藩の島津斉彬のよう、開明的な藩主の統治下、財政力が豊かであった西日本の雄藩が、海軍力の強化に熱心であった。

なかでも佐賀藩は特筆される。海軍伝習所へ諸藩中最も多くの青年を送ったのは佐賀藩である。俊英を選抜したので、習得もいちばん早かつたという（勝海舟『海軍歴史』）。

同藩は、幕府の了解を得て、蒸気軍艦1隻をオランダへ発注しており、その乗組員を養成する必要もあつた。この艦がコルベット艦「電流丸」である。「咸臨

丸」と同型で、安政5年（1858）に長崎で引き渡された。

藩内の三重津（現・佐賀市）には、艦船の修理・造船施設（佐賀藩海軍所）が設けられた。長崎海軍伝習所の閉鎖後は、士官養成の教育機関も兼備した。

近年、当地の発掘調査が実施され、実体が明らかになっている。

薩摩藩の蒸気軍艦は

輸人中古艦である。そのなかでは木造で外輪推进の「春日丸」が注目される。英國製。排水量

1015トン。

清国向けの通報艦として

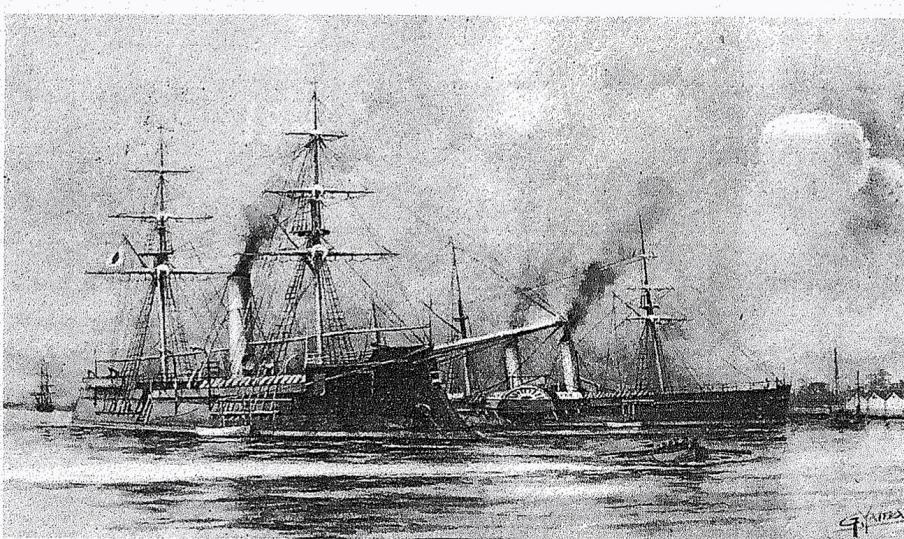
建造されたので、速力が速かつた。試運転で平均約16ノット出した記録が残っている。當時としては、たいへんな高速である。

箱館戦争では、「甲鉄」とともに、新政府艦隊の主力艦として活躍した。東郷平八郎はこのとき、砲術士官として同艦に乗り組んでいた。

以上が幕末の蒸気軍艦

が、艦船の整備に投じた莫大な資金の多くは船とともに雲散霧消し、歐米列強の軍事産業と貿易商が利益を得た。だが、有能な「人」は残つた。

（本誌編集委員）



甲鉄（左）と春日丸（山高五郎『日の丸船隊史話』より）